

一眼見て知れる青木の筆蹟、消印は新橋とある。封を切ると。文字は鮮やかだが、泪に曇る眼には朧ろに映る。

『小生儀、止むを得ぬ事情のため、いと惜しき戀をも、打ち捨てねばならぬ事と相成事情打ち明けては、互ひに未練のたねと存じ候へば、このまゝ永久に御別れ申す可く何事も運命と、御断念被下度候、さらば、……新橋驛にて青木、』

よくも斯んな事が書けたものだ、人に散々苦勞をさせながら、『止むを得ぬ事情とは』何事！エ、義理知らずの人非人と、町子は覺えず齒を喰ひ締つたが。やがて深刻な憤恨の影が頬に浮んだ。男と稱ふものは此んな慘酷なものだとは

今の今まで知らなかつた、男と稱ふものが總て憎らしい。今は世の中の男總てが、自分の敵である、自分は世の中の男總てを咀ふ、散々情を弄ばれた腹癒せに、以後は、男の情を散々弄げなければおかぬと決心した町子が。突然、學校行の袴を取つて、満身の力を兩手に籠めると、ビリリと裂けた袴の赤紫が、脂ぎつた純白い腕に、血潮の様に燃えた。

* * * * *

貞操を犠牲にさへすれば其處に大なる收入のある事を、發

見した女は禍なる哉。併し町子が斯んなになつて終つたのは、果して彼女一人の罪であらうか。若い女の心に誇傲の種を蒔た親の罪。社會の罪。墮落の首途を爲さしめた青木は實に咀ふ可き惡魔である。(終)

十日間 九十四里 徒歩物語

旅——さうだ田舎へ旅をしやう。痛切にして深刻なる生活味は、官能を疲勢させ、神経を糜爛させる都會生活によつて味ひ得らるゝとは稱へ。暫らく煤煙と塵埃の圈内から脱れたい。

山々の淺縁に——谿流の清韻に——淨らかな空氣に——自然は、生の歡喜滴る双手を擧げて、しつかりと私を抱擁して呉れるだらう。

此度の旅は、山の多い道を選んだ。先づ大阪から吹田、東能勢、園部を経て福知山へ。福知山から但馬の八鹿へ。八鹿から村岡、湯村を経て濱坂へ。それから日本海沿岸を、諸寄、浦富を経て鳥取市へ。鳥取から地頭を経て播磨に入り。平福、三日月を経て姫路へ。それから明石、神戸を経て大阪へ。二百二十四里。此中三十里だけは、汽車、電車の便をかることにした。

九十四里を徒歩にしたのは、身心を鍛ふことと。周章しく推移する印象をノートと収穫れることに依つて、近く實現せらるべき、歐洲大陸の漂浪と、其れを書く上に。有力な

経験と自信が得たかつたから。だから、孰らかと云へば移り氣で、我が儘な私ではあるが、此度の旅行は決して中止しないつもりだ。寒暖計が九十度を示さうと、泥濘が脛を没しやうと、この「決意」を溶ろかすことは能まい。焦げ附くやうな暑さと、死ぬ様な切さに堪え得た時、與へらるゝ體力に對する月桂冠はどんなに美しいだらう。

○第一日。八月九日。——大阪より、三島郡を

經て、能勢の妙見へ——。

午前三時出宅。上弦の月を東に見。巡查の氣味悪い眼に見送られ。眠りから覺めない市街を北へ貫通て三堤を東へ

歩いた。モスリン會社の、夜業の音響が、周囲の寂寞を破るのみである。振り返ると百萬の大都會は、測り知れない蒼黒い空の下に靜かに横つてゐる。斯うした時「たゞ一人」旅立つ、と云ふとが——夜の明けないうちに、少しでも遠い處迄落ち延びやうとする、法律違反者の遣はせ無さ。世に反き衆に反いた國外追放者の捨鉢な、氣分まで味はせる。路傍の草におく露が、脚絆に冷たく沁んだ。螢が蒼白い線を延いて、スウ〜と流れる。吹田や茨木から大阪へ出る野菜を積んだ馬車に出會ふ様になると、間もなく、灰色の雲を破つて眞紅な太陽が出た。ビール會社まで、十一二の

子供と道伴れになつた。學校は休みかときけば、尋常二年で廢したといふ。現今はビール會社へ毎日通勤つてゐるのだとのこと、如何な仕事だと、きいたけれど笑つて答へな

かつた。子供は一錢で蒸し芋を購つて頬張つた。——義務教育も完全に受けず。早くも、生活の荒海に、追ひやられた少年の暗い將來を、想はなかつた。

ビール會社へ着いたのが五時四十分。高橋氏は、「八時頃でなければ事務所に出られない」とのこと、二時間以上間があるの、會社を出て、其邊を寫生した。八時頃に行くと『高橋氏は社用で京都の方へ行かれた』といふ。佐藤氏に

會つて通過の證明をして貰ひ、麥酒の御馳走になつた。もう、暑い太陽が可也高く上つてゐる。鐵道線路を北へ越へて、東北へ歩いた。酒を嗜まない私を先刻の麥酒が少からず苦しめた。眞白に輝る路が遠くまで續いて、眼が眩ひさうだ。正面から照りつける日が、脊中を汗にし、歩く度に着物が、べたくくと肌につく。吹田から一里半計り來た時。ある掛茶屋の中から、妙な發音で呼び懸ける人がある。『紳士よ、此紙片をお読み下さい』紳士と云はれる柄ではないが、どうやら私に言つてゐるらしい。聲のする方を見ると、此暑さに冬の上衣を着た大男が紙片を突き出

してゐる。私は取り敢えず『失禮ですが、何處から——そして何處へ旅をしられるのですか』と尋ねた。『神戸から横濱へ』『長い旅です』と云つたら、五十近い赤ら顔を崩して、微笑した。紙片には『此者は英國人で、病妻看護の爲に横濱へ旅行するのだから、應分の惠與を望む』と云ふ意味が日本文で長たらしく書て、宛名は慈善家各位としてある。幾千里海を渡つた知らぬ土地で、他人の惠みに依つて續けねばならぬ旅の寂しさ。若し自分が斯んな境遇になつた時、恵んで貰ふ銀貨の一片に對する喜びを思つて、不覺財布へ手がいづたが、自分とても、餘裕の寡い、前途

の永い旅を想ふと、斯んな冷かなことを言つて終つた。『此紙に書いてある事は了解しました。』

けれども、私も徒歩で旅行をせねばならぬ程貧ですから：『紙片を返した。彼は一寸困つた様な表情をしたが、菓子箱を前に置いて、『空腹だ』と言ひながら頻りに頬張つてゐた。もつと話がしたかつたけれども、今日は午前中に福井村まで行かねばならぬ。一分間沈黙が続いた後斯う言つた。『私は、貴郎が幸福な旅を続けられんことを望む』彼は直ぐ『ありがたう』と言つた。『さようなら』と云ふと『さようなら』鸚鵡返しに言ひながら大きな手を出した。

甲から手首へかけて一面の筒青——、握手する力の強いことよ。此漂浪者に別れて、二里ばかり歩く間は、其ことばかり思へた。——私は彼を、單に西洋乞丐として看過することは能なかつた。

『食べたくなつたら、其處で働いて食へ。仕事が無ければ麪包を一片恵んで貰へ。然うして何國へもお前の行きたい箇處へ——』斯んな心持で平氣で故郷を後にするボヘミアンの心理は、どんな荒廢した土地でも、またどんなに郷黨に疎外されても、生れた地に縋り着いて、離れやうとはしない人達には解しられないだらう。

其身一つ、行きたい處へ行つて働けば、其がもう、全部である。家が無からうが年が寄らうが、そんなとは如何でもない。四十を越して。また、村から市街へ、市街から村へ、酒と女を漁つて行く。――。自暴と頽廢の領する處となつたゴルキーの描いた漂浪者が、歴々と見える。それにしても言語の不自由な、そして貧しい彼は、今宵を何處で明すとか。――。福井村を出外れると路は山へ入つてゆく。自然は樹蔭と嵐で、夏の山路を辿る者の汗を拭ひ。油蟬と蜩と、岩を噛む溪流の合唱を聴かせくれた。東能勢村へ着いたのは、もう夕暮れ近かつた。能勢の妙見山迄は、まだ一里半程歩か

ねばならぬ。――。旅宿は山の頂上にあるのだ――。第一日の旅に、歩行き過ぎた不慣れた旅人が、足を曳りながら旅宿へ着いた時は、眞暗だつた。風呂と、肉類拔きの夕食を、大急ぎで済ますと、直ぐ床を敷いて貰つた。顔が熱る、雑嚢を懸けた肩が痛む――。斯んな苦しい旅が、これから十日も繼續けられるだらうか。(大阪―春日―福井―余野―妙見)――。○行程十里十二丁)

第二日。八月十日。――。妙見山より丹波の檜山へ――。明るに早い夏の夜は、夢の半に過ぎていつた。嬉しいことには昨日の疲勞が、全然癒やされてゐる。眞直に立つた杉並木

が、朝靄の裡に、欄干近く迫つて。幾重にも重り合つた、薄紫の山々を、臥床から見下すことが能る。思つたより高い箇所だ。橙色の雲を突いて、眞紅な日が静かに登つてゐる。私は飛び起きて爽やかな朝風に吹かれながら、其の美観さに、恍惚と惹き附けられた。日の出の光景は、十錢を投じたならば、浅草や千日前の活動寫眞館で見ることとはあるが。小枝の微動ぎをも聴き取ることの能る閑寂さ——佳き朝を讚美する小禽の可憐い歌——水蒸氣の多い空気が作る、しつとりとした深山の情調——を背景にした日の出は、汗と喘ぎの代價を拂つた者にのみ、接することを許さるゝ

自然の藝術品であらう。

妙見へ詣りに来た、宮津の百姓で、五十計の男と道連れになつて、涼しい中に山を降りて終つた。材木を積んだ荷馬車が、大きい音響を立て、来る静寂な路を、木訥な田舎のひと、語りながら行くことが如何にも詩的だつた。そして老爺の息子二人共、日露戦争が奪つて終つたのを聴き、「弟の奴は丁度お前さん位で……」と微に言つて濕んだ眼で、疑と見られた時。私は、『萬歳』と『金鷄勳章』で飾られた戦争を呪はずにはゐられなかつた。曾我部で別れた。彼は龜岡の方へ私は八木の方へ——。

もう山路で無く、田の間を縫ふ縣道である。満眸緑の稻波の裡に、田舎の姉さん達が腰に巻いた真紅の紐の強烈い調子が、華やかな色彩に渴した漂浪者の眼に、泌み込んで来る。不生産的な都會の女を見慣れた私は、脊中からヂリヂリ照り附けられながら、十七八の女盛りを、蛙や泥鰌を友として、泥に塗れてゐる諸嬢に深い敬虔の念を捧げて通つた。

八木から園部迄の、鐵道線路に沿ふた陰の無い一里の路は、汗と塵埃に塗れた火夫の様な勞働であつた。園部から半里計りで觀音峠がある。険しくは無いが長い坂だ、自轉車

が幾臺も通つた。峠の頂上の、東、桐ノ庄村、西、竹野村といふ標柱の前で、綿の様な軀を横たへた。東からも西からも登つて来る者はない。蟬の聲が耳に立つばかり、折々頬を掠めて飛ぶ小虫の羽音が、明かに聞き取られるのにも、獨旅の悲みがしみぐくと味はれる。檜山へは、まだ三里歩行かねばならぬ。坂を降りながらハーモニカを吹いた。洋樂の音色は、鳶色の芽茸きや、鬱蒼たる周圍の杉木立に、調和しないとは云へ、谷から谷へ傳はる複雑な音響は、可也脚を軽くした。四時三十分に須知を通過して檜山へ六時十五分に着いた。

夕食後一寸旅宿を出て歩いてみた。何と云ふ暗さであらう。疎らな灯が三つ四つ數へられる計り。是れでも人の住む町かと思つた。戸川氏が歐米の漫遊を終へて、久しぶりで横濱の夜を見た時、「今迄歩いてみた中で、此處ほど暗い處は無かつた」と云つてゐる。横濱の夜さへ、暗いと思はせる歐羅巴の夜は如何なに華かで明るいだらう。歐洲の都會の夜と、此町の夜の隔たりを想ひ。短い一生を。華かな灯の色一つ見ずに、土臭い田舎で悶きにもがいて、死んでゆく、蠅蛆の様な人生を想ふた。旅宿の婢は私の様な貧しい客に對しても深切だつた。——女中に客と、云ふ

繩張りを踏み越えない範圍に於て——。九時寢。隣室で土地の人だらう、生糸の話をしてゐた。(妙見—曾我部—八木—園部—須知—檜山。行程十一里三十四丁〇計二十二里十町。)

○第三日。八月十一日。——檜山より、菟原峠を

越えて福知山へ——。

昨日も一昨日も歩き過ぎた。私は、もつと、脚を勞つてやらねばなるまい。今日は九里歩けば可いのだ。梅田、大久保は灰暗いうちに通つて、午前九時には峠も越えて終つた。蟬や小鶯の歌、溪流の私語きは、漂泊の途に上つて以來何

時も好い道連れになつて呉れた。菟原の宿を通り過すと、由良灣に注ぐ音無瀬川の上流が奇巖の間を縫ふて、緩く或は急に、蜿つてゐる。水面近く飛ぶ小虫を狙つて跳ね上る鮠の腹が銀色に輝る。此邊の農家は皆養蠶に忙しさうだつた。千束から上六人部へ往く路で『兄さん、此路で土方風をした、三十位の男に遭やはれしまへんか』と、二十五六の大きな荷物を負た、汗だらけの女に聲をかけられた。『二人連れ、老人の方には逢ひましたけれども、さう云ふ方には遭いません』判然云ふと、彼女は『さうだつか——』吐き出す様に言つて、路傍の石へ腰を下して終つた。——

暗愁に包まれた其顔が。人生の暗黒面を考へたがる若い漂泊者に、又悪い想像をさせた。

午後三時に福知山へ着。聯隊へ行つた。中田大尉の、軍人らしい髭髯は有りながら、どこか魅力ある紳士的な温顔は忘れられない。海軍士官達の、如才無いのは兼ねて知つてゐるが、陸軍でも私を失切させる様なことは無かつた。冷茶を饗せられた。瞥見しただけではあるが、營内の椅子寢臺——等の質素さは、祭日の金モール盡めの軍人に、憧憬れてゐる青年達の想ひも及ばぬところであらう。福知山から但馬の八鹿迄。約十里を汽車に乗つて今夜は其

處で泊る筈だ。私は福知山では、樹の多い空気の佳ささうな町だと思つたのと、中學校や聯隊が頭腦に残つただけで、平凡に去らねばならぬ。某文士は『旅をして忘れ難い思ひ出を残すには其土地の女と戀をすることだ』と云つてゐるが私は生憎そんな時間と餘裕を持たなかつた。汽車は午後六時二十分發だからまだ大分間がある。驛の構内に『福知山案内』と云ふのが掲かつてゐる。「河守三里十二丁。光伊勢四里。宮津十二里三丁。宇猪崎遊廓十六丁。旅團司令部十二丁。歩兵第二十聯隊十三丁。工兵第十大隊十八丁。遊廓は旅人に必要？なものとは云へ、旅團司令部と併記して

あるのは、珍だ。書生が四人來た。學習院の制服を着たのが一人交じつてゐる。カーキ色の詰襟で卷脚絆。頭髮は五分刈り、皮膚の赤銅色に焼けた處迄大ひに乃木式を發揮してゐる。袴も春の臙染め、臙げならぬ殿振りや、薄化粧で引き立たせ。美しい姫達と合奏す管絃樂に耽溺した公達を、今は斯んな日向臭い男にして終つた。——偉大なる『時の力』よ——。それにしても、衆は此の見すばらしい書生を、皇族方と机を並べて教を受ける人とは思はないだらう。その群は感じの好い東京語で快活に話をしてゐた。橋立へ行つたのらしい、舞鶴行きへ乗つた。

廳やがて、私わたしの乗のる汽き車しゃが來きた。上かみ川かは口ぐち、下しも夜や久く野のなどの。黄き
 ろい古クラシカル雅カルな灯ひの、細ほ長そなく列ならんでゐるのを右みぎに見みて馳はしつた。今こと年とし
 帝てい大だいの醫い科かを卒そとて。郷くにへ歸かへる青せい年ねんが、村むらの人ひとらしい四よ十じゅう男なんと
 盛さかんに談だんじてゐる。青せい年ねんは軍ぐん醫いになつて海かい軍ぐんの方ほうへ勤でやうと
 思おもふ其その相さう談だん旁かた々た歸かへ郷かへるのだと。言いつた後あとへ、微わ笑わらひながら『
 併しかし開かい業げふして、うんと儲まをけるのも可いい』と、附つけ加くはへた。『富とみ』
 と『譽ほまれ』の間あひだに佇たつて、去き就しゅうを決けつし兼かねてゐる青せい年ねんは羨うらや
 い。私わたしは密ひそかに、『希き望ぼうに輝かやももの、汝なんぢは二に兎とを追おふ勿なれ』と叫さけ
 んだ。眞ま實じつ、軍ぐん醫い總そう監かんになつたつて、十じゅう萬まん圓げん以上いじやまの富とみを獲えら
 れるかどうかは疑ぎ問もんである。此この青せい年ねんは和わ田だ山やまで下お車りた。私わたしは

山さん陰いん本ほん線せんへ乗のり換かへて、八や鹿かへ着ついたのが十じ時じ。疲つかれ切きつ
 てゐるので、驛えき前まへの旅やど宿どへ草わら鞋ぢを脱ぬいだ。葉は書がきを十じゅう枚まい書かい
 て臥と床こへ入はいつた時とき十二じふ時じが鳴なつた。——早はやく眠ねむりに就つかう
 明あ日すも歩あるかねばならぬ。(檜ひ山やま—菟う原はら—六む人にん部ぶ—福ふ知ち山やま。
 行ぎやう程りやう九く里り。○計けい三さん十じゅう一いち里り十じゅう丁てい)

第だい四し日にち。八や月がつ十じゅう二に日にち。——八や鹿かより村むら岡おかへ——。
 デカダン派はの詩し人にんが贊さん美びする、『快スワイ死ート』の樣やうな熟う睡まいは、一
 番ばん汽き車しゃの響ひびに破やぶられた。警けい察さつ、小せう學がく校こう、郵い使びん局きょく、あちこち
 の干ひ物もの屋やに並ならべられた焼や鮎あゆ、それから町まち全ぜん體たいに漂たふてゐる
 平へい靜せいな氣き分ぶんを刹せつ那なの印いん象しやうとして細ほ長そない町まちを貫ぬ通けた。街かい道だうへ

かゝる時分から、朝靄が次第に薄れて、表はれてきた、緑や淡紫の山々に、『あ、お早う』と言つてみた程。獨り旅の寂しい心は、諧謔と、友欲しさの念に驅られてゐた。豊岡川となつて日本海に注ぐ八木川の岸を行く。夏秋蠶生繭買入所などの廣告が處々に見え、繭を煮る匂ひが、強よい日に輝やく。桑の葉の間を縫うてくる。關宮で八井谷峠を越すと稱ふ中卒者と道連れになつた。可也高い箇所でも平地は決して遊ばせて無い。『此んな田は、收穫に大した差がなくて、借り賃が安いから、ある小作人には都合がよい。併し坂を上り下りせねばならぬから、身體は苦しい』と云ふ

意味を二十分ほど要つて話してくれた。三十丁ほど登ると櫻の茶屋と稱ふのがある。前方に櫻樹があつて、其下の窠から水がキラ／＼と流れる。其冷たいのを啜り、軀を拭ふて、折柄の山風に吹かれた時の爽快さは忘れられない。斯うした處で「自然」から與へられる水と風は、道頓堀のサイダー、扇風器に比して更に深刻にして切實なものであつた。私は此爽快を味はんが爲には、汗と喘ぎの代償を決して辭せないであらう。山を越して終ふと福岡の宿で、伴れの男と別れた。又沈黙を守つて歩かねばならぬ獨旅である。とは云へ、白い道路と、緑の森と山と田と、遠方に見え

る茅葺の外、何等心の静寧を破る可き色彩と音響を持たない境を。獨で辿つてゐる時ほど、冥想を恣にし、自分が自然の一員たることを自覺する時は無いのである。絶壁を右にし、緩やかな流れを左にした道を、腰から下は舊日本を代表する草鞋脚絆で固め、首の上は麥藁帽や近眼鏡をつけた若い旅人が行く。連日、日に直射された手は鳶色に染まつてゐる。水が緑を見せて澱んだ處では眞黒な小供が跳ね返つてゐた。旅人は、草鞋や脚絆を解く煩はしさが無ければ、自分も泳ぎたいと思つた。

村岡へ着いたのが午後三時。まだ二里や三里行く時間はあ

るが、左の足の裏が痛むので、今日は、もう憩むことにした。夜、此町の芝居を見る。四等十五錢と云ふ、地方にしては意外の高値だが、好々景氣で一里二里の道を、提燈持ちでやつて来た連中も多かつた。俳優の技はギツクリ／＼煩い思ひ入れをする。陳い型で、観客の熱情に對しては遙に遜色あるものであつた。「假名手本忠臣藏」の、おかる勘平道行きの處で、私は、旅宿へ歸つて来た。婆さんが一人居るきり、他は皆觀劇？に行つたのだといふ。田舎の人々が、如何に「華かな色彩と音響」に憧れてゐるか、解る。其欲望は臆て都會を戀ふるの念となり。かくて尊重す可き農村

を、衰頹の淵に追ひやるであらう。娛樂機關の設備——此れは田園荒廢を患ふる者の、直ちに着手す可き事業の一つではあるまいか。(八鹿—關宮—福岡—村岡。行程八里四丁〇計三十九里十四丁。)

○第五日。八月十三日。——村岡より、春木峠を

越えて諸寄へ——。

村岡を暗い中に出立て、灰白くなる頃に春木峠の麓へきた險しい間道を行く。露が脚絆をびつしより、にした。拭いても拭いても、汗が湧く。塵埃の寡い空気を、私の肺臓がどんなに賞翫したらう。眼の届く限りに人影は發出せな

い。二間幅の道路は私の爲に作られた様——。山腹を蛇り樹蔭を抜けて、遙か彼方へ延びてゐる。

不圖自己の目的の爲に、手段の如何を擇ばない階級の人に想到した時。私は強い恐怖に襲はれた。今、逞しい暴漢が前に立つて、『汝の所持品、若くは生命を』と要求されたならば。おめくくと彼に所持品を渡す外はないのである。身に寸鐵も帯びないで、斯うした圈内に立つた私は、餘程の大膽者で無ければならぬ。

紫に黄、黒に水色。茶に白——。見なれぬ色を持つた、博物家の、欲しがらうな蝶の、妖艶な姿で飛ぶのを、其

れに身を扮した、妖魔では無いかと、疑ふ様な浪漫的な氣も湧いた。今日も亦帷子や緑の上衣をつけた聲自慢の聲樂家が、複雑な合唱を聴かせてくれた。山腹の掛け茶屋で『お暑うお座んしてなあ』と云ふ店の婆さんに返答もせず「先づ」、西瓜やサイダーを食つた程、渴してゐた。漂泊の途に上つて以來、各地の水と果物を漁つて歩いたのだが、よく是で腹を壊さぬと思つた。如是閑氏は、倫敦ハイドパークの宿無しを見て、其『生存力』の強いのに感心してゐるが、私は自分を感心した。五十丁の春木峠を越して長い坂を下ると湯村である。鹽類泉に屬する温泉が

ある。浴つてゐる暇は無かつた。魚屋の店頭には、黒鯛、鯛、白い透き通る様な烏賊などが並べられ。磯近くなつたのを思はせる。濱坂へ出る路で、十一位と九つ位の女子が月琴を持つて來るのに遭遇つた。旅藝人假令其技は拙なくとも——此れほど、詩的な空想や情調を齎らすものはあるまい。『どちらへ』と聞けば『此邊を』と云ふ。宅は濱坂で、親達は海へ出漁るのださうな。五錢の白銅を渡して『得意なのを一つ聴かせておくれ』と言つた。二人は月琴を執り上げた。逢へば、別れと——かねてより——知りつゝ未練の——いや増さり——。

誰れに習つたか、二上り新内の六ヶ敷節廻しを、よく覚え
たものだ。都會の夜の、罪と戀の巷を、夜更けから明け方
へかけて、彷彿歩く無宿の音楽者の、闌れた咽喉から、し
みぐぐと聴いたことのある此曲を、斯うした處で、少女の
口から聴かうとは、思ひもかけぬことだつた。

『さやうなら、氣をつけてお行で』無量の感慨を此一句に
籠めて、別れるのが、何だか惜しい様に思へた。

観音山を右に見て左へ曲ると濱坂である。海！海！灰色の
空と、同じ色に濁つて見えるとは云へ、山と森にせよこま
しく、閉ぢられてゐた眼には、一直線に横たはつてゐる水

平線が實に自由な感じを與へてくれた。濱坂を出外れると
逞しい赤い禪の男。半裸體の女。に交つて子供が飛び廻つて
ゐる。釣道具や烏賊が干してある。夥しい蠅だ。私は此
漁村を、好奇の眼を輝やかして通つた。瞥見した『濱の女』
の快い肉附と血色は忘れない。濱坂から十町ばかりで、
山陰線の隧道の上を西へ越すと、諸寄の町が見える。此夜
篠原氏方泊。——夕方海に入つた。柔らかな滑らかな水が、
胸や肩を洗つて、身體が前方へく進んでゆく爽快さには
少年の様な若い歡喜が湧いた。(村岡—春木—湯村—濱坂
—諸寄。行程七里五丁。○計四十六里十九丁。)

○ 第六日 八月十四日。—— 諸寄より日本海

沿岸を鳥取へ——。

K子さん——丹波の山路も、心配して下さつた様な事も無く、此處まで來ることが能ました。残りの旅も、多分滞りなく續けられるでしやう。どんな暑さも、どんな險しさも私を阻めることは能ますまい。『我に自由を與へよ然らずんば死を』と叫んだ熱情家の様に、私は『斷じて目的を貫徹せん、然らずんば死……』斯うした心持で、後三四十年度の粗末な生を、いつも事業の前には投げ出してゐる。——甚だ箇人主義で貴女には濟まないけれど——生命を投げ出した

者程大膽な者はない。百里の旅に、生命懸けは大袈裟ですが、まあ意氣込みがさうなのです。そんなことは兎に角今日は諸寄から鳥取への旅を御知らせする筈でしたね。今日の路は、今迄の中、一番歩き甲斐があります。海岸と稱へば直ぐ、松並木と白い砂を想像するでしやう。——須磨や舞子を見慣れた貴女には、無理も無いことですが——。諸寄以西の海岸を行く旅人は、始終坂路を攀ぢねばならぬ。左が絶壁で、右の足下へは、もう、蒼い／＼海が迫つてゐる。私は繪以外に、斯んな美しい海を見たことがない。臥牛、龜、海豹、の様な岩が散らばつて、それに靜に碎ける浪が

海面に白い泡を擡げた時、涼しい配合を生んだ。華奢な松を頂いた、橙色の島が碧瑪瑙の様な海に浮かぶを見。岩の根に泌み入る浪の嘔びを聞いたならば。貴女は怒濤の叫びに、膽寒かるべき北海に、繊細美を發見した意外を驚くでしやう。私は歩きながら、鶯茶色の岩と、赤茶色の藻の間を、茶に黒い斑點のある小魚のスウ〜泳いでるのを發見するのが、實に興深い仕事でした。又潮の干た砂地の、餌に集つてゐる赤い缺を持つた蟹が、登音に驚いて、花が散る様に颯と各自の穴に駆けこでん行くのが、如何なに物珍しい光景でしたらう。

浦富の掛茶屋で、網代の方へ廻つて、島取へ出るのが非常に絶景と聞いて、其方へ廻りました。村外れで某女に『網代へはこの路ですか』と聞いたなら『えー其處を越しなさんせ』春水の書いた小説中の女が使ふ様な、古雅な言葉で教てくれました。此女は若くて、可也美しいとお思いでしやう。さうした想像を湧かせる言葉の調子です。けれども實は七十近い婆さんでした。これじや問題に成りませんねえ。網代から鳥取へ出る路は、草に埋れ判らなくなつてゐる。地圖にも書いてない。四邊に人影は發見せないので、また浦富へ引き返し、二里ばかり損をしました。

浦富から鳥取へ國道を行くには。此美しい海と別れねばならぬ。シベリヤ嵐吹き荒ぶ冬の日には奔馬の様な怒濤に岸を噛まれるのだらうが、夏が來たら、又今の様な美しさを表して呉れ、私がいつか緩りとお前を訪れる迄——さやうなら——斯う言つて、脚絆に、疲れた草鞋から、白い埃を揚げながら、些も樹蔭のない、暑い〜路を黙つて歩きました。

聞いても聞いても、二里とか、一里半とか云ふ答です。午前の三里は譯は無いが、午後の一里には、うんざりします。漸く半里で鳥取へ入らうとする處へ辿り着いて、きりわり

の茶屋と稱ふので、憩みました。此處へ來る途で、凄い池があつた其種ヶ池に關いて、一場の物語がある。

此村から近い村の、某富豪の婢が、毎夜何處からか柿を持つて來た。人が其出處を怪しんで、或晩其跡を随けたら、種ヶ池の中に在る、中島と云ふ小さい島の、柿の樹から取つて來るのが判つたが。婢は其儘ずぶぐと池へ姿を没して終つた。其れは、多分池の主だらう。とのこと。一場の物語と云ふ程の、ものでもありませんね。

西瓜で脚を醫して、一跨ぎに鳥取へ入つた。屋敷風の家のおほい處です。午後七時鳥取新報社を訪ひ。二宮よし子女史

方泊。尙森脇竹聲氏も厚意を寄せられました。——では十九日お眼に懸るまで。さやうなら。(諸寄—釜谷—浦富—鳥取—。行程八里二十八丁。○計五十五里十一丁。)

○第七日 八月十五日。——鳥取より千代川に

沿ひて地頭へ——。

鳥取では久し振りに、帯の型を氣にして歩く都會風の女を見た。私の足袋の破れを、傷しさうに或は冷かに眺めて行つた。絹布を纏ひ黄金鎖を捲ひたならば、購つた金が、高利貸しの手から出てゐやうと、不正なものであらうと。一途に其人を信頼し尊敬する程、若い女は感情的で淺薄であ

る。女程服装に依つて人を判定するに嚴なるものはあるまい。けれども、足袋の破れを、傷ましさうに見た女と、侮蔑の眼を以てした女の性格の差を私は明瞭に意識する事が能た。其にしても私は何時の間に、斯んな風で市街を歩き得る様になつたのだらう。異性に對しては、襟の合せ方さへ氣になつた、十七八の、若い匂やかな氣分は、永久に我胸から去つたのであらうか。

昨日のに較べて、今日の道は一層單調で青田の間を、白っぽい反射の強烈しい道が、長く長く續いてゐる。樹蔭が少しも無い。用瀬行き馬車が、埃を浴せながら追ひ越して

行く馬車の中から、訝し氣な顔が、幾つも私を見てゐた。さうだらう。僅かの金を拂へば馬車に乗れるのに、この暑い埃だらけの道を、歩いてゐる者の心事は、解するに苦しみのだから。まだ十一時前なのに、痛烈な饑と渴きが迫つて来た。此時私の心には。戀も譽も富も——何物も無い。たい水と食物を狂氣の様に求むる獸性がある計りだ。掛茶屋を待ち兼ねて、無言の儘、先づ西瓜を食つた上、其處の人と言葉を交はした。圓通寺橋を渡ると、川岸へ出た。草の生へた河底が表れ、狭い流れの中で子供が魚を捕つてゐる。河原橋を渡る頃から涼しい風が出た。景色も單調でな

い。松並木の續く街道は、廣重の繪を想はせ、どうしても管笠を被つた奴が、文箱を擔いで出て來ねばならぬ背景だ。二時半に用瀬を通過けた。「反物いらんか」と云つて軒別に廻つてゐる支那人に逢ふ。漂浪好きの人種——。貨殖主義の人種。亞米利加に、南洋に、歐羅巴に——黄金の花咲く春を求めて、燕の様に、世界を渡り歩く人種——。同じ蒙古人でありながら、日本人とは如何してこんなに違ふのだらう。此男の口から、漂浪的色彩を帯びた話が聞きたかつたのだが、私の方が先になつて終つた。道は山を縫うて進む。川は漸々狭くなつて、もう谿流にな

つてゐる。鮎取りの人が大きなのを數匹宛持つて通る。澤山捕れるらしい。暮れやうとする今日の日を、蝸が心ゆく計鳴く。

電柱に留つたのを、洋傘の先端で驚かす、小供らしい悪戯も獨旅の寂しさである。

ある社の前で、境内の樹木を折つた、八歳位の弟を叱る兄の言葉は、どんなに純朴だつたらう。『天神さのじやけ罰が當るわいや』此邊の人情は純朴のやうだつた。言葉が表はしてゐる様に。

路傍に在る、日清戦役で死だ、陸軍歩兵一等卒壽村氏の墓の

前を曲ると、茶色の瓦に、茅葺の混つた、不等邊三角形の地頭の町が見た泊つた宿は料理屋を兼てゐるらしく。此邊の青年が来て鮎か何かで酒を飲み、遅く迄騒いでゐた。(鳥取

—河原—用瀬—地頭。行程八里六丁〇計六十三里十七丁。)

○第八日 八月十六日。——地頭より播磨

の平福へ——。

暗い中に宿を出た。餘程来た心算で聞くと、駒歸の坂までは、まだ二里あるとのこと。張りきつた心が少し弛んだ。

『まあ急がずに行かう』と思ふ。樽見橋を越す頃には智頭川は一間位の谿流になつてゐる。出會ふのは、山へ仕事に

行く此邊の人ばかりで、商人でも、百姓でもない私を凝と眺めて通つた。

志戸坂峠へ懸つた。材木を積んだ馬車が五臺、汗塗れの馬子が、痩せ馬を勵まして登つて行く。皮膚を突き破りはしないかと危まれる迄、傷しく骨立つてゐる。荷を卑くのを一生の仕事と定められ、聽ては馬肉屋の店頭に吊るされる馬の運命を憐んだ。――併し其れを助けてゆく馬子と雖も、痩せ馬と、幾何の徑庭が在るのだらうと思ふと、暗い心になつた。

峠の頂上で、不味い焼餅を食べた。獸の様に食欲が隆になつてゐる時ですら、不味く感ずるのだから、實は餘程不味いのだらう。例によつて算の水を貪つた。誰か『傍に戀しき人の在る如く、眼まぐるほしき……』と云つた、赤蜻蛉が漂ふてゐる。坂路を降りた。國道に沿ふて學校がある。校札を見ると、岡山縣英田郡西栗倉村立影石尋常小學校としてある。岡山は姫路より西と云ふことが先入主になつてゐる頭脳には、此邊に岡山縣のあるのが不思議に思はれた。相變らず白いカツ／＼とする道が続く。感傷に充ちた漂泊者の心は、牛の涎が描いた路上の曲線にまで、何物かを捕へやうとしてやまない。或茶店で三里ほど、先の

ことを尋ねたが知らぬ。婆さんは『井の中の、がへる(蛙)じやす』と云つた。

平福の少し手前で、盆踊りの練習らしい、ことを行つてゐる若い女の群を見た。『夕暮れ』や『我もの』と異つて、盛んに足を活動させる。踊が頗る迅速い。何時か寄席で見たと、亞米利加、印度人の踊と共通の箇處が澤山あつた。樂隊が欲しい様だ。新らし下駄に際立つてみえる赤銅色の足。怒つた肩。不恰好な手足や。眞紅な廉りぼんを誇かに衆の前で踊つてゐる彼女等は、何と云ふ無邪氣さであらう。生れた小さい天地と、享けた醜い肉體を賛美し、満足して、

生を樂んでゐる。幸福なる村の乙女よ。私は彼女等を何時々々までも、香水薫じ、繞羅翻へる、都會と稱ふ、誘惑者から遠ざけたい。そこに煩悶なく嗟嘆無き生があるであらう。

平福の町の入口で憩む。東京の私立中學を三年で廢したと云ふ。よく饒舌る賣藥行商が國々の女の話をしてゐた。旅宿で、入浴と夕飯が濟んでから、町を歩いてみた。斯うした處に有り勝ちの、見渡す限り數點の灯が明滅するばかりで、宿場の夜は、何の興も無く暮れてゆく。都會では遊ぶために夜が来る。田舎では寝る爲に——。夜は寝るのが

自然のやうだ。私も旅に出てからは。晝は馬の様に歩き、夜は豚の様に寝てゐる。自然の神は、決度私に辛して下るだらう。明日は姫路迄十二里十三丁の道である。左の足首の腫れが、今夜中に退いて呉れれば可いが。(智頭―大原―石井―平福。行程八里十三丁。○計七十二里十二丁。)

○第九日 晴 八月十七日。——平福より姫路へ——。

暗い眠りから醒めない平福の町に。さやうなら、を告げて。しつとりと夜露に濡れた道へ、軽い第一歩を踏み出した。今日は、此度の旅行中、一番長い道を歩かねばならぬと云ふ意識が、心を弓弦の様に緊張させた。叢で蟋蟀が鳴く

疎む程冷たい風だ。——何時の間に、秋が来たのだらう——。

行途に重なる山々が、墨繪の様に、頂上は濃く麓は露で淡く暈されながら、夜は静に明けていった。不恰好の石標に右あかほ、左ひめち道、と教へられる儘左へ曲つて行くと二三丁小川の岸を通つて、道は又山へ入る。雑草の裡に交て、薄紅色、鮮明な撫子が風に揺めく。私の草鞋へ、後脚で露を散らして田へ飛び込んでいった、悪戯者の殿様蛙が、縁と茶と、黄金色で飾られた滑かな脊を、輝らせながら、あの石垣の中に、青大將の凄い眼の、煌つてゐるのも知らずに、鼻歌を謡つてゐる。遠目の利かぬ鼯が、二三間前を

横切つた。

険しくはないが、遣るせない、長い／＼かます坂を越すと例に依つて、二間幅の美しい國道は私の専有である。九時前に三日月に着いた。標柱を見ると。神戸元標え二十三里十五丁四十八間五分。姫路標柱え八里十二丁四間九分。とある、もう四里来たかと思ふと足が軽くなつた。

裾を端折つて、赤い褌を出した姉さんや豫備砲兵一等卒らしい體格の男に澤山出會ふ。茶店で聞けば『盆禮』と云つて此頃は親族廻りをするのださうな。新宮への道では、晴れ續きの爲に涸れた溜池や、底を露出した河を見た。涸れ

残つた水溜りに酸素に渴した、小鮎や鮠が水面へ、口を出して喘いでゐる。斯した少いものに迄纏てゐる傷ましい生の執着より。新宮を貫通ると、眞白な、限のぐらつく道だ。険しくても樹蔭のある、山路が戀しい。猪崎は網干迄電車が通いてゐて。都會風の町だ。

此邊から姫路へ行く旅人は、家の入口と、並んだ牛小屋から、「お心よし」らしい黒や茶の大きな顔が道を眺めながら反芻を行つてゐるのを所々に発見すだらう。追分坂を越すと飾西の長池がある。長い池だ、周圍三丁以上あらう。水草が一面に浮てゐる。因幡の種ヶ池の様な深さと凄みがない。

茶店の婆さんに聞いたが、物語はないと云ふ。飾西の青年會の事業で鱒を放養してさうだ。是りや實用的で可い。夢前川を渡る頃から、コバルト色の山を脊にしてくつきりと白い鷺城が見えてきた。標柱には、一里六丁とある。傾いた日が、私の疲れ切つた影を、白い路に長く投げる。一時間ほどで病院下へ出た。今夜は此處で泊る筈だったが、明石迄汽車にして、明石に宿泊することにした。二十餘哩を一飛びに、私は、間もなく、明石の停車場に立つてゐた。私は此處で、久振りに華な灯と色を見ることが能た。雜貨店に、散髪屋に、繪葉書店に——純都會化した光景は、

二年前の明石に對する、私の記憶からは、如何しても組立てることの能ないものである。

旅宿の婢に、明石で一番面白い箇處と、教へられるまゝに停車場を後にして南へ三丁、錦江橋を渡るならば、遙に淡路の漁村の灯を望み。左に黒い松並木の遊園地を眺めることが能る。そして右手の二層三層に重つた橙色の灯が、美しく水に碎ける邊に湧く、華かな絃歌は、若い漂浪者の胸の血を、擾亂さねばおかぬであらう。とは云へ、狭くろしい檻の裡へ、金糸と赤襟で臭骸を包んで、輪廓の不正な顔を押し並べたのに想到したならば、其れが歡樂の巷として

は、餘りに悲惨であり、没趣味であることを感せずにはゐられないであらう。

遊園地と遊廊を併置した、明石人の度量を偉とし、此繁榮を建設した努力を壯とする私は、同時に此名濱を、紛々たる浴悪趣味の裡に、埋没し去らないことを、希はざるを得ない。十時寢。風が荒くて、浪の音が、停車場近くの宿迄も聞こえてゐた。(平福—三日月—新宮—姫路—。行程十二里十三丁。○計八十四里二十四丁。)

○第十日 晴 八月十八日。——明石より浦づたひ

に神戸へ——。

浦傳ひと稱つても、諸寄から浦富への路の様に海水が足下へ迫つて、藻や魚貝が眺められるのではない。岩や松の面白いのが在るのでもない。それでも家の切れ目には、濃藍の海が折々姿を見せてくれた。瓦を焼く烟と、晴天續づきで、一寸計にもなつた、ふか〜する埃の不快感を、自働車や荷馬車が、一層不快にする。今度の旅行中一番埃の多い道である。路傍の樹は、緑葉が、白葉になつてゐる渚を行けば埃は無いがぐさ〜する。矢張り埃の裡を歩かねばならなかつた。

舞子の停車場近くに、眼の覚める様な、水色の建築物が在

る。「吳錦堂別荘」と云ふ標札が懸かつてゐる。皮膚の黄、白、褐、黒——と國籍の如何は論ずる處でない。要は、何物とも交換し得る黄金を、獲得した者が、世界到る處の優者であり、勝利者であり、王者であるのだらう。三十萬金を一夕の饗宴に擲つて、平然たる米國の富豪を想ひ。十五圓の月俸に一家を養つて行く人を想ひ。同じ時代に生き。同じ空気を呼吸し。同じく自然の法則に支配せらるゝ人類でありながら、其差異の甚しさを、今更の様に驚いた。此邊には日本人の別荘も澤山在つたが、半分は戸が閉まつてゐた。虚榮の爲に別荘を造り。妾を圍ひ。自動車を驅り。

さては爵位を得んとする彼等は憐む可き哉。こんなことを奮慨しても始らぬ、私は旅行記を書く筈だつた。須磨近くなつてきた。けれども『見れば二八の御顔に、花も耻らふ薄化粧』孰盛卿の優姿を。ORIENTAL'S SEASIDE MILLER と記された看板や。米國式汽罐車を使つた下關行き最急行列車、の間から構成り出すことは能なかつた。六千噸ばかりの客船が神戸の方へ行く。進推機が眞白な泡を立てゝゐる。西須磨で大橋氏を訪ひ。神戸迄、又白い道を歩いた。旅の終り。が近づいたのを意識すると、過ぎし『漂泊の愉快』が、泌々と懐ひ返された。

兵庫で、神戸の榮町へ行く、最も捷路を、下婢らしい女に尋ねたら、『電車へ乗つてだしたら、早よおまつせ』と教へてくれた。榮町方面へ行く電車を前に置いて、道を尋ねてゐるのだから、『歩いて行く氣だ』と云ふことは、解りさうなものだと思つた。又新日報社を訪ふたのは三時半だつた。これで豫定、九十四里の徒歩旅行は終つた。——もう、深切な貴女？に教へられる迄も無く電車に乗らう。——（明石―舞子―須磨―神戸。行程六里。○計九十四里二十四丁）今夜は魚崎の秋山惣郷氏方へ泊る筈で、日暮れ迄は大分間がある。神戸を少し見て歩いた。

元町の看板が眼に附いた。TSUTAYA LADIES FANCY GOODS. のは意匠に於て。YATA NAKAO. 雜貨店のは色彩に於て。NIKKO SILKSTOREのは眼に付き易き點に於て三福對だつた。元町を東へ東へ行つて、『南京町』へ曲つてみた。某饅頭やへ入つた。辮髪を落して、日本人と些とも異らぬ親爺が『何食べるか』と尋ねた。『まんじゆを……』『幾つ』『三つ』饅頭が三つ前に置かれた。私になるべく暇をかけて其れを食べた。壁に黄輿の大きい寫眞が掲げてある。室は一度揚げた様に油臭い。赤い紙に、何か書て壁に貼りつけてあるが油染みて讀めない。奥に、耳

に緑色の環を吊るした谷口香嬌氏が描く様な、優しい女がゐた。饅頭を賣る丈けで、よく暮らして行けると思つた外、期待した程の発見は無かつた。此處を出て海岸の方へ行くと、衣囊に金貨をチャラつかす外國水兵連を待つ、居酒屋で椅子が二三十も並てある蓄音機が「海軍マーチ」をやつてゐる。悪い想像をさせる、蒼白い顔をした女が四五人もゐた。THE COSMOPOLITAN CLUB. では、銜へ煙管の、傳法肌の主人を、日本の英語で苦しめた。そして、どんな風をしてゐても、心易く口を利用してくれる、開放的で、平民的な白人の氣風を味つた。主人は私しの飛んでもない要

求に應じかねて『御氣の毒様』を繰り返してゐたのを忘れない。黄昏に、阪神電車で魚崎の秋山恕郷氏方へ着いた。私が三才から十九才まで―最も記憶の鮮かな時代を―此家庭で養育されたので。今でも、何處よりも「自分の宅」らしく感じる家庭である。風呂に入つて、糊のついた浴衣と着換へて人らしくなつた。水と食物に憧れながら「馬の様に歩いたこと」や。不安の底に澱んでゐる、「漂浪の愉快」それから。緊りと、自然に抱擁され、真に其れの憧憬者となり得た「刹那の氣分」などを、泌々と懐ひ返した。翌十九日は、帝大の秀才で、快活で厚情で、多趣味で話せ

る信君——否同胞——（私は永久に兄弟と稱はせて貰ひたい。またそう思つてゐる）と。終日魚釣りや、海水浴で暮れた。其夕方、煤烟の都會、とは云へ、懐かしい大阪へ歸て來た。

稿を終へてみると、煩はしい迄感傷に充ちたいらくした抒情文が出来上つてゐるのに驚いた。

來るべき大旅行には、もつと、冷靜に。切實に。深く。細く書いてみたいと思ふ。

（終）（大正元年十月）

今回の旅行に、紹介の勞を執られ。宿所を供せられ。直接間接に便宜を與れらし諸氏の芳名を左に記して謝

意を表す

- 吹田麥酒株式會社。……佐藤 氏 但馬諸寄港。……篠原六一氏
- 福井村々長。……室源 十郎氏 舞鶴。海軍主計少監。上田範治氏
- 福知山聯隊。陸軍大尉。中田 一實氏 鳥取新報社。……高橋新吉氏
- 明俊尋常高等小學校長。小泉菊次郎氏 但馬諸寄港。……仲家仲藏氏
- 鳥取市青年會長。……森脇 竹藏氏 攝津魚崎。從四位。……秋山恕郷氏
- 西須磨。……畫伯。……大橋 翠石氏 鳥取市。……二宮吉子氏
- 神戸又新日報社。……柳内 鐵次氏 宮内省書記官男爵。……小原駱吉氏
- やまと新聞大阪支局。……本莊 白石氏 用瀬村役場。助役。……徳永式年氏

明日は又働らくことか

枕元のラムプを消した。下宿屋の二階。澄んだ夜中の空気が、私を真闇に冷たく浸した。街で逢つた知らぬ美しい女が、眼の裡へ浮んで直ぐ消えた。寂寥と哀愁が舞々と迫つてくる。時計の刻み。胸の鼓動。垢染みた夜着の襟に當たる呼吸。斯うしたものが明らか
に聞きとられた。何處かで蟋蟀が啼く。遠いく國。深いく場所へ運ばれる様な心地だ。

此儘晝と稱ふものが來なけりやいゝ！

此儘靜かに死ねるものならいゝ！

明日は又働らくことか。——喧囂——塵埃——汗。

(終)

京の秋

鳴川の、岸の柳の黄緑の芽が、細い雨に濡れて輝つてゐる
下を、襟足の艶麗しい舞妓が行き。花見小路に都踊が開
まり。夜櫻が群集の足を祇園に惹き附けてゐる中に。何處
からともなく、薔薇色の黄昏を持つた、浮氣ぼい夏が來る。
その誘惑と魅力に酔ひ耽つてゐる人々は、又何時の間にか
意見好きの叔父の様な秋の。心も骨も引き緊める、冷めた
い手に肩を叩かれた。

心持黄ばんだ中に、黄櫨、楓の紅を見せて、その隙間から藍が、つた樓閣の瓦が窺いてゐる、軟柔い東山の景色を。澄んだ空気を透して眺め渡した時ほど、心ゆくものは無い。私の暗い性格は。秋の悲しみに堪えない様な、京都の光と音を如何なに懐んだらう。私は數時間を圓山公園の共同椅子に凭つて過すために、大阪から毎日曜、此處に出懸ける煩しさを厭はなかつた。

水禽の胸毛に私語く池の水が、衰へた日にチラ／＼と輝り。春は群衆と、塵芥と、謠と酒の香に上氣した櫻が。假令、華かな座敷から歸つて來た藝妓が、消え残つた火鉢の火を

搔きをこして、煙草を吹つてゐる様な、寂しい姿で澄ましてゐる。道路を、我物顔に濶歩する體格も血色も、憎らしい程可い觀光歐羅巴人の、小指に煌く金剛石の指環から。何處の都會にも發見すことの能る、終日共同椅子に凭つて動かない、放浪者の單衣の重ね着に眼を移した時、ある感慨の胸に渦巻くを禁じ得なかつたが。重ね着の本人は平氣である。人は寧ろ蒙昧が可いかも知れない。祇園の藝妓が、二人散歩に來た。孰れも同じ型の、白い薄い肌。繊細い首。流れた肩。活氣の無い眼。——然し可愛い。——宛然人形の様な女。——それでも、特殊の階級

に浸つてゐるだけに、誇張した會話振りや、巧みな眼遣ひは、普通女の比ではない。

華奢作りで、色が眞白で、柔い多い頭髪を銀杏返しか島田に結つて、帯を少さく高く結んだ中京の娘——活動寫眞の説明者や、雇人と戀をして家出をした娘——が想へた。

——活辯や手代は富に——學識に——總ての點に於て、新しい女の、一顧にも値しないものであるに——。

お染や八重垣姫の心持を享け繼いだ京の女。近代の科學教育が、刻々に亡してゆく、戀に對する沒我的情熱の流れを、今も尙把持してゐる京の女は、しほらしいではないか——。

四條橋を西へ渡つて、京極へ入ると、着飾つた群集が、押返してゐる。同じ享樂の巷ではあるけれども、京都人は、此處に、淺草や千日前で見える様な、飲食店の跋扈を許さなかつた。美しい袋物屋。清楚な漬物屋。玩具屋。——が其店頭に優婉な京都趣味を展げてゐた。

寺町で灯が點いたが、街路を曲ると、もう冥府の郷の様に暗く寂しく。低い軒に朦朧たる灯が心細く列んで、蟋蟀の聲がする。まだ鐵輪の人力車が、高い響を立て、通つた。京都に電燈は不適りである。祇園の一方で「由良さん」の頬を照らした行燈の、あの黄ろい輝りが、最も適はしく思

はれる。古雅クラシックの都みやよ。私わたしはお前まへの美びが、心無こころない文明ぶんめいの斧のと
 時ときの鋸のこぎりの爲ために。無雜むざう作さに破こ壊はされてゆくのが、惜おしくて
 ならぬ。——斯こんなことを胸むねの裡うちで叫さけんで、五條ごてうの方ほうへ歩ある
 いた。

京阪電車けいはんてんしゃの中なかで、茸狩たけがり戻もどりの人達ひとたちの籠かごから、切實せつじつな秋あきの
 香かを嗅かぎ。東山ひがしやま——祇園ぎげん——鳴川なるがわ——京極きやうごく——此等これらの名詞めいご
 を繰くり返かへすことに依よつて、確實かくじつに、古雅クラシックな都みやこと、其その秋あき
 を、頭腦あたまの裡うちに築きつき上げながら、烟けむりの多おほい大阪おほさかへ運はこばれて
 來きた。(終)

病院より

N君くん——。僕ぼくの病氣びやうきを、誰たれよりも心配しんぱいして呉くれた君きみに對たい
 して。君きみへの報告ほうこくを、誰たれへよりも先さきにすることは、當然たうぜんの
 ことと信しんずる。

今日けふは愈々いよいよ、大腿部だいたいぶの腫物しゅぶつを、切開せつかいする日ひだ。手術しゆじゆつは午後ごご
 一時じからだといふ。澄すんだ空そらが硝子がらす越しごしに見える。

黄きや赤あかの落葉おちばを搔かき集あつめてゐる。病院びやういんの園丁えんていの頑強がんきやうりとし
 た脚あしが、羨うらやましい。病氣びやうきになつた時ときほど、健康けんこうの幸福かうふくを想おも

ふものは無いねえ——。雑誌を讀んでゐる中に、時間が來て、半裸體の僕は冷たい手術臺へ仰向きに載せられた。宛然俎の魚の様だつた。ヨードホルムや、石炭酸の香が頭腦まで泌みこむ。

覺悟はしてゐるのだが。不安と恐怖と心細さと。それに苦痛を忌避する情が紛紜つて、苛々する様な。やるせ無い様な。恐ろしい——、何ともいへぬ不快な心持だ。君が傍にゐてくれれば可いと思つた。僕は、焼き殺された人——。電車に片脚轢き切斷られた人——。なるだけ苦しい思ひを想像して。多寡の知れた腫物位と、思ふ様に努めた。

溢れる様に、石炭酸を充たした皿に。浸してある、先端の曲つた手術刀や。鉗や。膿を掻き出す柄の長い匙——。種々の器械が、摺れ合つて發する、「カチン」といふ、極く微細な、沈痛な音響を明確に聽き取ることが能るほど、神経が鋭くなつてゐた。

看護婦が、少い刷毛へ石鹼をつけて、腫物の周圍を洗つてゐる。それが濟むと白衣の人が手術臺の傍へ集つた。醫師の手が局部へ接觸すると、少し氣が落着いた。卑怯な私の心が、もう苦痛は免れぬと覺悟したのかもしれない。麻痺藥の注射だ。注射器の針が一寸も入つた様に思ふ。片

脚全部を、劇薬に浸した様に痛い。又異つた方から、針がギユウーと刺し込まれた。——二分ほど経つた——。細目を開けてみると。醫師が今。佳く切れさうな、煌々の手術刀を執つた處だ。「今だ」と思つて一呼吸深く吸ひこんで準備をした。醫師は、局部の皮膚を存分に切つたらしく。血や膿液の、ダラ〜と腿の裏へ流れるのは解るけれども切られてゐる箇處は些も痛まなかつた。先刻の注射が利いてゐるのだと思ふと、ゆつたりした氣になつていつた。突然ギリ〜と太い錐を揉み込む様な痛みを覺えた。僕は不覺慄え上つた。麻痺薬の利いてゐない箇處を、手術刀が

刳つてゐるのだ。額に油汗が滲んで。後で見たら握り締めた指の爪の先端が折てゐたよ。——此苦痛が一分ばかり續いた——。

『辛かつたでしやう。もう濟みました。』看護婦が耳語いてくれた。僕は斯んな場合。斯んな耳語は。「天來の福音」と形容すべき、最も適切なるものだと思つたね。(勿論後からだ。其時はそんなことを考へる餘裕は無かつた。)看護婦には美人は無いと相場の決つたものだが。當時は實際美しく。頼もしく。神々しく女神の様に思へて。白い肩懸けをして活動寫眞館に出没する、××看護婦會の會員との間

には、遠い／＼間隔りのある様に信じた。

それから五分の後、僕は噎せる様なヨードホルムの香に侵されて。眞白な床に、静に横はつてゐた。女神がブランデーを飲ませて呉れた。——此れが切開した日の概略だ。もう四日経過た。後一週間で退院能る。御互に戯談を言ひ合ふ様になつてからは。もう、看護婦を女神の様に思へなくなつた。惜しいやうに思ふ。

全快になつたら久振りで田舎へ遠足をやらう。歸りには又「いろは」で大いに食かう。さやうなら。H君にも宜しく。暇があつたら、一度女神？を見に来たまへな。(終)

朝

霧 (終)

大正元年十二月二十日印刷
大正元年十二月廿五日發行

朝靄奧附

定價金三拾五錢

著者 上田憲司

發行者 杉本要

印刷者 堀越幸

不許複製



發兌元

東京市京橋區中橋廣小路
振替口座東京一〇五〇番
電話京橋三七七番
大阪市東區北渡邊町
振替口座東京二八二三番
電話長本局二七四五番

梁江堂書店

杉本梁江堂

●商人は只一片の書翰認方如何で千金を失する事あり

高橋笠峰先生著

最新刊

實用商業書翰文

菊判洋裝
定價金四十五錢
郵税金八錢

實業書翰文の巧拙は吾人が商取引上直に利害に關するを以て其技能の熟達を要するは商取引上の一大要點なり、然して是れが好參考書の要求や切なるに際し即ち要求に適應せる本書を發行す

内容

- ▲第一編に手紙認方の心得を詳述し
- ▲第二編に商取引に必要なる文例二百題
- ▲第三編に普通慣用語熟語數千をイロハ別に集録し
- ▲第四編に商事要項五十項を詳説し
- ▲附録に外國度量衡比較表及我國開港場を添ゆ

如何に其内容の完備せる且注意周到にして懇切叮嚀然かも平易細説漏すなく眞に書翰文中無二の參考たり

●商業學校作文科の參考として無二の良書也

角田浩々先生序 堂本印象著作

いの字繪本

戀の都
大阪の巻

▲和紙木版刷口繪木版色刷入和装
寫真版三色版類美本定價金六十錢送料六錢

青年畫家として此頃斯界に嘖々の名聲を振ふてゐる印象君の繪は恰も夢二君の畫と等しく印象一派獨得の奇筆を發揮してゐる、卷中、阿彌陀池で逢つた人、女店員、中座の客、の繪などは呼べば答へんとするほど良く描けてある、其他芦邊踊にて、惠比須さまへ、化粧せし女など、數十の繪を集めて一卷とせるものなり敢て薦む、現代青年男女は此趣味に接せられよ、

小説叢書 金色夜叉の完成

■ 黒 法 師 著 ■

◎ 荒 尾 讓 介

◎ 間 貫 一

◎ 間 宮 子

◎ 後 の 荒 尾 讓 介

◎ 赤 檉 滿 枝

半世の運命を煩悶と悔恨とに葬り去られた鴨澤宮子は、煩悶の結果遂に病を起して、既に一命を失はんとしたのであるが親切なる荒尾が情の下に辛くも戀の復活を得て再び貫一が手に瀕死の病軀を引取られたり

其後如何に成行ならん只諸氏の愛讀を俟つ耳

四六判全五冊

定價各

金四十五錢

郵 税 六 錢

國木田獨步先生著

版六 版五 版廿二 版八十

濤

渚

武

獨

聲

藏

步

野

集

菊版美裝
定價金八十錢
郵稅金八錢

菊半裁美裝
定價金三十五錢
郵稅金六錢

菊半裁美裝
定價金三十五錢
郵稅金六錢

第二、三、六版美裝
各定價金四十五錢
各郵稅金六錢

天下獨步の著
作を最通
じて天下
も天多
青年情
數の動
調をした
かした
る不
の傑作
は此の
四篇に
よりて
代表せ
らる

萬人向の面白き小説

篠原嶺葉著	黑法師著	公孫子著	笛村子著	信田葛葉著
姫	四	可	此	薔
百	人	憐	秘	薇
合	男	嬢	蜜	娘
定價金八十錢 郵稅金八錢	定價金四十五錢 郵稅金六錢	定價金四十五錢 郵稅金六錢	定價金四十五錢 郵稅金六錢	定價金四十五錢 郵稅金六錢

與謝野晶子女史著

次目

- 呂行の手紙
- 妹
- 養子
- 夏の夜
- 餅の生
- 私生兒
- 故郷の夢
- 除夜の
- 門前の家
- 薄人芝居
- 素人芝居
- 綿帽
- 兄の朝
- 或日の朝
- 櫻
- 親類

寸珍箱入
クローズ
綴類美本
金十元錢
送料六錢

雲

の

いろ

いろ

明治文藝の一明星、古今を通じての一天才と仰が
る、晶子女史が煥發せる才情と燃ゆるが如き思想
を驅て作る處、篇々皆金玉の聲を振へるもの、短
篇小説あり、一幕物あり、文壇亦た新に一異彩を
加ふるもの是れ。

中澤弘光氏裝幀

田山花袋先生著

艸籠

說

定價四金五錢
郵稅六錢

小

新文藝の急先鋒として天下を風

靡したる花袋田山先生が、紅黃紫白と
りぐぐに美しき傑作三篇を收めたるを

▲梅屋の梅 ○自殺 ○秋晴 ▼

『草籠』となす、遂く人生の眞實に觸
れ、興趣ある新文藝の新味に接せんと
欲する者は來りて本書を繙け。

久保天隨先生著

新體書翰文

菊判美裝
定價金四十五錢
郵税金 八錢

現代に
實用す
べき理
想的書
翰文の
好實例

陳腐なる因襲の形式に流れず故意にハイカラを學ばず
新古雅俗の哀を折し、真情流露、些の虚構なきは則ち
著者が書翰文の理想として收むる百五十餘篇の文例は
正に之を證す、現代文章の典型、之を措いて他に求む
べからず。卷頭、作法を説く懇切を極む、本書一卷滾
々として盡きざる實際的書翰文の源泉也、敢て青年學
生及び一般人士の愛讀を俟つ。

●聖賢と英傑偉人は吾等が肉體と精神の父祖也

村浦天臺居士序 杉浦非水畫伯裝幀
大町桂月先生總評 福田重政先生纂述

袖珍形箱入

聖賢格言集

總クローズ頗美本
定價金六十五錢
郵税金 六錢

佛典西泰
妙言格
附錄

▲格言は徒らに之を大集して心の養ひとなるに非ず
本書は在來の格言集座右銘の缺點に鑒みて其の精髓
を集めたれば處生の指針日夕の規箴反省の料となり
て強く吾等の心を動かして力ある事其比を見ず聖賢
に私淑して修養に志す者將來の顯達を期する者必ず
一本を座右に備へよ

●夕日父祖の親訓を咀嚼して生活の眞態に入る！

國民必讀の快書

伊藤銀月先生著 杉浦非水裝幀

秀吉と家康

四六版箱入上製
頗美本全一冊
定價金一圓十錢
郵稅金 八 錢

紙數五百五十五頁

建國三千年來最も興味深き彼の戰國時代の真相を詳説し、信長以下群雄割據の狀、著者が健筆によりて縱横に批評せらる。本書を讀む者身自ら戰國に入るの感あらん、薄暮、屋に出で、夜來つて燈を挑げて尙措く能はざるの快著。

270
640

終

